

研究集会

奈文研主催の研究集会を開催した。ごらんのとおり、多趣多彩！

◆日本古代律令国家における末端支配

機構の研究

1996年12月5～6日

この研究は、郡以下の末端支配のあり方を探ることを目的としたものである。考古・文献史学の研究者46人の参加を得て研究集会を開催し、郷の編成と村落結合、郷長や雑任などの人的組織、郷レベルの官衙（郷衙）の有無、郡衙と郷との木簡授受関係、郡衙出先施設、といった論点を中心に研究報告と討議をおこなった。郷の役所については、国衙・郡衙と並ぶ官衙の存在を考える見解と、郡衙施設の分置など郡衙諸施設の多様な在り方を示すものとみる意見とに分かれ、結論は得られなかったが、郡衙以下の支配の実態をめぐる研究の現状と問題点が整理され、今後共に取り組むべき課題を明確にすることができた。また、末端支配の拠点と村落あるいは集落群との係わりも議論され、末端官衙遺跡論と古代集落遺跡研究との接点を浮かび上がらせたことも大きな成果といえよう。（山中敏史）

◆薬師寺移建論に意見あり

1997年3月29～30日

報告と講演は、寺崎保広「薬師寺移建論争の概要と問題点」、花谷浩「本薬師寺の発掘調査」、藤井恵介（東大）「建築史からみた薬師寺」、田辺征夫（東博）「平城京遷都と寺院移建」。寺崎は近年の薬師寺論争の方向と問題点をさぐった。薬師像に関して岩永省三、東塔については宮上茂隆の論考を紹介。平城薬師寺回廊の複廊への「設計変更」が「改築」に近いかと推測した。花谷は本薬師寺跡発掘調査の成果を述べ、3段階の造営順を指摘。西塔以外は移建を否定。西塔は創建が遅れ、文武2年時点で完成を疑問視した。藤井氏は薬師寺論争における建築史の発言を研究史的に論述。東塔問題の解決には解体修理しか道はなく、薬師寺建築様式の特異性と唐の建築との関係探求も課題

とした。田辺氏は古代の遷都のうち旧都の寺院が大学して移ったのは平城遷都だけであり、平城京寺院として大安寺の重要性とそれを主導した道慈の役割を指摘した。（花谷 浩）

◆書跡資料調査保存の現状と課題

1997年3月29日

古文書、經典、典籍などの調査や保管の現場において、各関係者の立場により、調査や保管についての認識が若干の異なる場所があったと思われる。たとえば、文書の調査法、調書の形式、ラベル貼付、使用用語の不統一、目録の体裁、保管の方法等々の問題である。この研究会は、書跡資料関係者間ではできるだけそれらに関して共通の認識をもつようになることを意図したものである。今年度は、①奈文研の書跡資料の状況と課題、②滋賀県での古文書調査の実態、③調査成果とその情報処理についての報告、をおこなった。初回で、現状報告とそこでの課題の提起が主であったため、参加者の共通認識の形成までにはいたらなかった。しかし、調査現場では明確化しきれない違いをお互いにはっきりと認識することにより、今後より議論が深化する前提にはなったと考えられる。（綾村 宏）

◆古代都城における行政機構の

成立と展開

1997年2月22～23日

第1回目の宮城中枢部の諸問題について、今年は官衙の諸問題を検討した。官衙（曹司）の意味はひろく多様である。

①構造：8世紀の姿をもとに、曹司を官人の事務および生活空間とすると、官衙は政庁、附属倉、倉、宿所、厨などの諸施設をもつ。検出遺構と官衙を結びつけるには遺物、史料を含めた総合的な検討が必要で、プランから直ちに官衙を推定することは難しいようである。

②起源：岸俊男は、朝堂院がもつ朝参（挨拶）、朝儀（儀式）、朝政（実務）の3機能のうち、朝政の機能が肥大化したと考える。曹司の起源は朝堂院の成立とともにあり、朝堂院の衰退に反比例して発展したというのである。これに対し、吉川真司は、朝堂と曹司の政務は機能的に別物であり、当初より併存したと報告した。諸宮の調査事例からみると、吉川説が合

理性をもつようである。

③展開：浄御原宮の内郭が内裏とすると、宮の周りには内廷機構で、後の八省にあたる外廷機構はやや離れた場所に点在する。外廷機構を宮域内部に取り込むのは方1キロの宮域が成立する藤原宮段階である。ただし、遷都当初の姿は不詳で、比較的整うのは大宝令以後であろう。後期藤原宮の官衙は平城宮に影響を及ぼすが、官衙を含め、宮域全体の地割り方法は長岡宮段階で一変し、平安宮に移行する。この段階で、平安宮の諸司厨町（宮外官衙）の祖型が成立するのであろう。このように前・後期の藤原宮と長岡宮が、官衙展開の大きな画期となる。なお、報告集『古代都城における行政機構の成立と展開』をご参照いただければ幸いである。（金子裕之）

◆遺跡の建造物復原方法の研究

1997年3月14日

近年、発掘された建築遺構から建造物が復原される例が増えている。建造物復原は遺跡を理解する方法として有効な手段であるが、まだ歴史が浅いこともあって、安易な復原や、意義・目的意識が明確でないものが少なくない。本研究は、建造物の遺跡の整備はどうあるべきかを、これまでの事例調査等をおこなうことによって、問題点を整理し、今後の復原整備事業のあり方の方法をさぐるものである。本中真（文化庁）、江面嗣人（文化庁）、吉岡泰英（福井県立朝倉氏遺跡資料館）の諸氏にも研究に参加していただいた。本年度は3カ年計画の第2年次で、全国の遺跡における建造物復原事業実態調査を都道府県教育委員会の協力を得ながら実施した。研究集会においては、復原事業の基本計画から復原実施までのプロセスの中に内在する問題点について意見交換をおこなった。（村田健一）

◆日本の住まいの起源と系譜に関するシンポジウムⅡ「平地住居と高床建物」

1996年10月18～19日

1995年度の「堅穴住居の系譜」に引き続き、96年度は表記のシンポジウムを開催した。近年、日本各地で続々と出土している縄文・弥生時代の掘立柱建物を対象に、以下の3セッションをおこなった。

「平地住居と高床建物」シンポジウム

I. 縄文集落と掘立柱建物

報告：石井寛 大工原豊 宮本長二郎

コメント：大貫静夫 小山修三

II. 弥生時代の大型掘立柱建物

報告：武末純一 廣瀬和雄

コメント：都出比呂志 浅川滋男

III. 南方と北方のクラ

報告：浅川滋男 佐藤浩司 太田邦夫

コメント：宮本長二郎 植木久

掘立柱建物の場合、通常、旧生活面が削平されているため、機能・構造とも不明な点が多く、議論全体に消化不良の感がいなめなかった。今後、報告書を作成するなかで考察を深めていきたい。

(浅川滋男)

◆遺跡土壌の微生物、生化学物質の研究

1997年2月28日～3月1日

1) 脂質分析の成果と問題点、2) DNAによるイヌとブタの系統、の2つの問題をめぐって研究集会をおこなった。参加者は約30名であった。1) 脂質分析については、R. エバーシュッド(ブリストル大学)による、土器の器壁に染み込んだ植物に起因するワックス分からキャベツなどを煮込んだことがわかる例などの報告に続いて、中野益男(帯広畜産大学)の脂質分析と免疫抗体反応による最近の遺跡での成果について報告があった。コメントーターとして、小林正史(北陸女子短期大学)から、種々の脂肪酸が土中で相対的な比率を守りながら分解していくとは考えにくく、特定の脂肪酸が他に比べて分解されやすいのではという意見、堀内晶子(国際キリスト教大学)より土器に吸着させた脂質の分解の進行と回収率とについて実験的な方法からのコメントを得た。DNAについては、石黒直隆(帯広畜

産大学)から、在来ブタ、ニホンイノシシ、西洋ブタなどの遺伝子データベースを構築し、遺跡出土のブタ/イノシシの骨から抽出した試料とを比較した結果、弥生遺跡出土のブタ/イノシシのなかには在来ブタに共通するミトコンドリアDNAをもつものが存在することがあきらかになった。イヌについては、人為的交雑がすすんでいるためか、Dループ、Cytbについてもクラスターにばらつきが大きく、古代家犬の品種別分類は困難であるとの中間報告を得た。(松井 章)

◆文化的景観の研究

1997年1月29日

1992年の第16回世界遺産委員会において文化遺産の範疇に文化的景観Cultural Landscapeの概念が導入され、国内でも関心が高まった。日本では明治以来、法制度的に保存されてきた「名勝」がこの概念に包括されるが、その成立の歴史的背景、保存制度の特徴、保存政策のあり方など研究課題は少なくない。そこで第1回研究会では「文化的景観とは何か」という点に的を絞って議論した。報告は以下のとおり。丸山宏(京大)「近代における京都の名勝保護政策について」、小野佐和子(千葉大)「イギリス湖水地方と比較した月ヶ瀬梅林の近代における変容について」、赤坂信(千葉大)「歴史的環境保存の問題点」、安原啓示(文化庁)「名勝の指定および整備の現況について」、本中真(文化庁)「世界遺産と文化的景観について」、内田和伸「遺跡に重なる文化的景観について」。(内田和伸)

◆戦国時代の庭園遺跡

1997年3月21日

近年、発掘調査による情報が増大している戦国時代の地方武将の居館の庭園について、研究集会を開催した。大内氏館跡(山口県)、江馬氏館跡(岐阜県)、一乗谷朝倉氏遺跡(福井県)、万徳院跡(広島県)、長氏館跡(群馬県)の各庭園遺構について、発掘担当者等の報告をうけ、庭園の意匠的特色を中心に討議をした。これら戦国時代の武将居館の庭園は、建物からの観賞を主眼とした座観式の庭園であり、池は浅く護岸の石組を全周にまわす室町時代の庭園一般の意匠的特色を備えている。ところが、必ずしも庭園築造に適した場所とはいえない防衛上の拠点

に立地したためか、池に遊水池的な役割、あるいは築山に土塁的な役割をもたせるなど、武将居館としての機能的要請による意匠が認められることもあきらかになった。(小野健吉)

◆保存科学における色の諸問題

1997年2月20日

埋蔵文化財センター主催による保存科学研究集会を、平城宮跡資料館講堂において開催した。今回の研究集会は、文化財における色の問題をテーマとし、顔料・染料・考古遺物・伝世品あるいは壁画・壁体といった様々な観点から、8名の講演者による口頭発表をおこなった。また、情報交換の場をできる限り多く設定することを目的として、ポスターによる発表も企画したところ、赤色顔料に関する5件の展示がなされた。総合討議では、とくに赤色顔料の産地・製法に関する問題について活発な議論がおこなわれ、新たな見解や問題点がクローズアップされた。また、古代壁画の復原や整備に関連して、顔料推定における従来の分析法の限界とそれを打破するための新たなアプローチについても提言があった。(肥塚隆保)

◆遺跡地図情報システムの研究

1997年2月14日

奈文研では、遺跡の調査研究において現況地形図、条坊復原図、調査区割図、遺構実測図といった地図の情報の整理を手作業でおこなっており、効率化システムの必要性を痛感している。そこで、国土地理院を中心とする空間データ基盤整備事業について理解を深めるとともに、文化財研究への応用を進めつつある機関の事例を検討するため、遺跡地図情報システム研究会(第1回)を開催した。まず国土地理院の中堀義郎氏が、空間データ基盤整備とGIS(地理情報システム)について、GIS研究会やGIS関係省庁連絡会議の報告を中心に紹介した。ついで、太宰府市、京都市、奈文研が事例を報告した。過去のデータを活用するため、データ型式などの標準化の必要性を強く認識した。今後は都城への応用を統一的に議論すると同時に、都城外地域についてもデータの扱い方を検討する必要がある、継続的な研究が求められる。(森本 晋)